



イスラマバードのスラムでのまちづくり

1 イスラマバードのスラム

パキスタンの首都イスラマバードは、現在、推定で約100万の人口を有する中都市である。ギリシア人建築家ドクシアデスが、グリッド・パターンを基本にしてマスタープランを作成した計画都市でもある。

イスラマバードの都心部にはスラムが8カ所ほど存在し、清掃を生業とする人々（スウィーパー）が主に居住することからスウィーパー・コロニーと呼ばれている。スウィーパーは民族でいうとパンジャーブ人で、ほとんどがクリスチャンである。都市開発を管轄する首都開発庁は、スウィーパー・コロニーの住環境改善事業をオンサイトで実施しているが、1995年からリロケーション事業も計画し、パイロット・プロジェクトとして8カ所のなかの1カ所から105戸を選び、コロニーの隣接地に新しい居住地区をつくって事業を開始した。

2 パイロット・プロジェクト

パキスタンのスラム開発においては、20-40戸からなる路地を単位として住民たちが集まって組織をつくり、自助努力によって下水道敷設などのインフラ整備を行なう方法が広まっている。パイロットプロジェクト地区には4本の路地がひかれ、首都開発庁主導で住民組織が路地ごとにつくられた。ただし、パイロット・プロジェクトでは次のインフラ整備3点、つまり各戸への下水道敷設、2カ所の公共水道設置、路地の舗装は、自助努力ではなく同庁によって実施され、住民組織は他都市での事業モデルをそのまま導入したため形式的につくられたものであった。費用として住民は1戸あたり約67平方フィートの土地代15,000ルピー（約3万円、以下1ルピー約2円で計算願いたい）を最初に一括で支払い、インフラ分25,000ルピーを50回の分割で支払うことになっていた。しかし、スウィーパーの平均月収が3,000-3,500ルピーであり支払いが容易ではないこと、事前の約束では電気・ガスも同庁が整備するはずだったと

住民が主張して混乱したことなどから支払いは遅れ、この様子に落胆した首都開発庁は他事業に注力したことから、同プロジェクトの第1フェーズ完了は5年ほど遅れた。

3 住民によるプロジェクト実施

結局、電気・ガス整備は住民が実施することとなり、2カ所の公共水道では水が不足するため井戸の設置も必要となったものの、こうした時に本来機能すべき住民組織が、形式的につくられていたことから活用できなかった。そこで住民たちは、従来からある血縁をもとにした集団ごとに四つの組織をつくり、それぞれ独自にプロジェクトを始めた。簡易井戸掘削やポンプの維持管理、電気・ガス整備のための積立（各世帯から50-300ルピーを毎月徴収）、といった活動は全て新しい組織が主体となった。4組織の構成員は路地ごとに集住してはならず、入り組んで居住しているが、インフラの維持管理は路地単位で隣近所が協力しなければ実施できない。スウィーパーの社会では、同じパンジャーブ人であるとかクリスチャンであるとの同質的条件よりも、血縁集団の繋がりが優先されるため、路地単位での事業や維持管理事項は各組織の代表者の話し合いによって協力体制を確保している。もともと、組織間のいざこざも多く、お互いの利益となる事項にもかかわらず協力を拒むケースも散見されるため、地区としてのまとまりを醸成させるようなプロジェクトも必要とされている。



パイロット・プロジェクト地区の路地



住民自身で簡易井戸を掘る様子